

地域における視覚障害教育の充実を目指して  
～盲学校と小中学校が連携した実践～

愛知県教育委員会特別支援教育課

1 はじめに

障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに適切に対応するため、地域の教育資源（小学校・中学校・特別支援学校）を効果的に組み合わせることにより、「専門的な教育を受けたい」「地域の学校で学びたい」といったニーズに対応して支援を提供できるよう、県内の盲学校の小・中学部に在籍する児童生徒を対象として、地域における視覚障害教育の在り方を研究することをねらいとして、令和元年・2年度の2年間、県立盲学校と市教育委員会、居住地小学校が連携して取り組んだ実践について報告する。

2 研究の目的

- 交流及び共同学習に関わる教育課程や指導体制の条件整備を図り、効果的な学習支援の在り方について検証する。
- 交流及び共同学習の機会の拡充による、障害のある子どもと障害のない子どもの相互理解の推進を図る。
- 地域の小・中学校における視覚障害教育の充実を図る。

3 研究の方法

(1) 効果的な学習支援の在り方

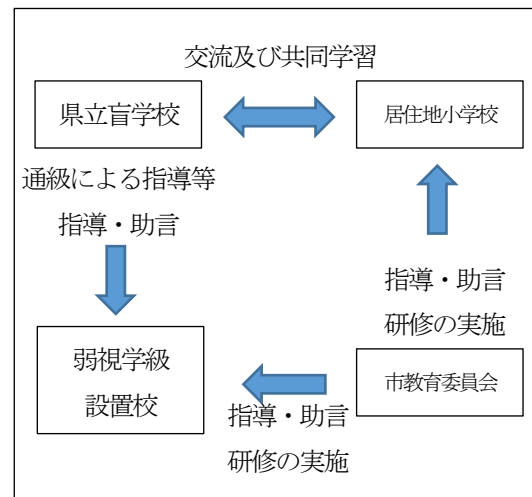
年間を通して計画的に交流及び共同学習を複数回実施し、その前後に関係者で連絡会議をもち、計画、実践、評価、改善のPDCAサイクルを行うことで効果的な学習支援の在り方について検証する。

(2) 相互理解の推進

小学校の教員が対象児童についての理解を深めて実践に臨められるよう障害理解研修会（市主催）と連動し、全市的な参観授業の形式をとり、多面的な視点で実践評価をし、よりよい相互理解の在り方について検証する。

(3) 視覚障害教育の充実

年間を通して、計画的にテーマを設定し、研修会を開催する。併せて、全市的に特別支援学級担当教員の参加を募り、日頃の実践で検討を要することについて、情報・意見交換を行う。研修会の内容として、講義のみでなく、疑似体験を含めた演習やそのことに関するグループディスカッションを組み入れ、より研修内容の理解が深められるよう工夫して行うことで、地域の小・中学校の視覚障害教育の充実が図られるようにする。



【研究組織】

## 4 研究の実際

### (1) 盲学校在籍児童の居住地校における交流及び共同学習

#### ア 在り方検討会議の開催

##### (ア) 令和元年度

第1回(R1. 6. 12) : 事業の趣旨説明、取組内容・方法の確認、今後の予定

第2回(R1. 11. 21) : モデル事業の進捗状況の確認、交流及び共同学習の参観

第3回(R2. 3. 5) : モデル事業の報告、来年度の予定

##### (イ) 令和2年度

第1回(R2. 7. 8) : 研究内容、方法の確認

第2回(R2. 12. 22) : 実施状況の確認及び授業内容の点検等

第3回(R3. 3. 17) : 1年間の実践の評価等

#### イ 居住地校との連絡調整（連絡会議の開催）

##### (ア) 方法

第1回在り方検討会議の際に双方にとって最も連絡の取りやすい連絡調整方法を決めた。併せて、モデル事業に臨む基本的な考え方について確認し合った。その後は適宜、電話やメールで連絡を取り合うとともに在り方検討会議や事前学習会、交流及び共同学習の折にも行った。

##### (イ) 内容

対象児童・居住地校児童の実態把握、交流及び共同学習の年間計画・内容の検討、各交流及び共同学習の実施状況や取組の評価等について、話し合った。

#### ウ 居住地校における環境整備

対象児童は点字を用いて学習している。よって、点字を打つときに音の出る点字タイプライターで筆記すること、点字教科書等の学習上必要な物品が多くあり、それらに乗せるサブテーブルや保管するロッカーを座席の近くに配置する必要があること、盲学校の教員が対象児童のサポートをする必要が生じた際に座席が前のほうであった場合、後ろの児童の視線を遮ってしまうことを踏まえ、座席の位置を最後部とすることとした。また、交流する学級の普段の状況の中で子ども同士が関わり、対象児童



【 対象児童の学習環境 】

児童にとって不便、不都合な状況であっても自分なりに対応方法を考えたり、いろいろと工夫したりすることも交流及び共同学習の大切なねらいとして位置付けることについて、対象児童の担任と交流学級の担任とで共通理解を図った上で交流及び共同学習を行うこととした。周りの環境を対象児童に合わせるのではなく、対象児童が周りに合わせることを大事な考えとした。例えば、給食に用いるおかず用のお皿についても盲学校で用いられている仕切りのある皿でなく、居住地校の児童が使用している仕切りのないお皿を意図的に使用して、そのお皿を用いることで対象児童なりに工夫をすることや周りの児童に必要なに応じて援助依頼を行う機会につながるようにした。併せて、対象児童の移動時等のガイドは、極力、盲学校教員や居住地校教員でなく、居住地校児童が行うこととし、居住地校児童との友人関係を自然な関係性の中で構築することもねらうこととした。

## エ 事前学習会の開催

### (ア) 令和元年度

- 第1回(R1. 9. 24) :居住地校職員への視覚障害理解研修会(弱視児童・盲児童について)  
弱視学級担当者情報交換会(自立活動指導計画の作成について)
- 第2回(R1. 12. 4) :交流学級在籍児童への視覚障害理解教育について(授業参観・研究協議)  
弱視学級担当者情報交換会(実態表、個別の教育支援計画、個別の指導計画の様式について)
- 第3回(R2. 2. 18) :今年度の反省と次年度の取組について

### (イ) 令和2年度

- 第1回(R2. 11. 26) :特別支援学級・学校の児童を受け入れる、通常の学級担任のよりよい指導・支援の在り方について —交流学級の担任として必要なこと—  
※新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ中止
- 第2回(R3. 2. 3) :特別支援学級・学校の児童を受け入れる、通常の学級担任のよりよい指導・支援の在り方について —交流児童の担任として必要なこと—

地域の視覚障害教育の専門性の向上を図ることをねらいとして、令和元年度に3回、令和2年度に1回、それぞれテーマを決めて行った。テーマは、「視覚障害の理解」、「交流学級児童への視覚障害理解」、「特別支援学級・学校の児童を受け入れる、通常学級担任のよりよい指導・支援の在り方」とし、授業参観・研究協議を行う形式で実施した。併せて、弱視学級担当者情報交換会を実施した。

研修会は、視覚障害児童への支援・指導についての疑似体験を含めた基礎的な講習を行った上で弱視学級担当教員が研究授業を実施し、協議したことで、視覚障害教育に対する理解を深める機会とすることができた。

情報交換会では、実態表、個別の教育支援計画、個別の指導計画、自立活動指導計画の作成等について話し合った。それぞれの学校の取組状況や困っていること、課題、工夫などを共有することができ、今後に生かせる会となった。



【疑似体験中の様子】

## オ 交流及び共同学習の実際

### (ア) 令和元年度

- 第1回(R1. 6. 26)
- ・国語、理科、道徳、算数、体育、総合的な学習の時間(以下「総合」)の授業で実施
  - ・総合で「点字」をテーマに実施

第2回(R1. 11. 21)

- ・国語、体育、算数、理科、道徳(資料「思いやりのかたち」)の授業で実施

第3回(R2. 2. 18)

- ・行事「居住地校の2分の1成人式」に対象児童が参加して実施

### (イ) 令和2年度(主にリモートで実施)

授業交流 7回(国語(11/26、3/17・18)、算数(2/1・3・12・16))

行事交流 1回(防災フェスタ(2/26))



【リモートでの共同学習】

休憩時間の交流 16回（自己紹介・簡単なゲーム(7/22、10/15・22、10/30、11/5・12・19、12/3・10・21、1/14・21・28、2/4・26、3/4)）（以上24回 リモートで実施）

学級活動 1回（お楽しみ会、ゲーム等）（3/23）（居住地小学校で実施）

#### (ウ) 対象児童の様子

令和元年度の第1回の交流及び共同学習では、国語、理科、道徳、算数、総合、体育の授業で実施した。総合では、「点字」をテーマに対象児童が居住地校児童に点字を教える形で行った。居住地校の文化祭で福祉をテーマに発表し、点字を読んでいるところを見てもらったり、友達が点字で書いた名前を読んだりした。45分の休憩時間に友達が集まり、ゲームの話で盛り上がり、土曜日に遊ぶ約束ができた。弱視学級の友達や他の学級の友達とも話すことができ、友達と学校探検をした。友達の人数に圧倒されている感じで、発する声は小さめであった。学校でのつながりをきっかけに居住地校児童が対象児童の自宅へ遊びに行くようになり、対象児童にとって友達の存在が大きくなり、地元につながりができる大きなきっかけになった。

第2回の交流及び共同学習では、国語、体育、算数、理科、道徳の授業で実施した。道徳では、「思いやりのかたち」という資料で点字ブロックを取り上げ、居住地校児童、対象児童、双方の考えを出し合った。友達の発表を聞いたり、指名されて戸惑ったりしながら自分の考えを発表することができた。恥ずかしい気持ちが強く出るようになり、45分の休憩時間にどう動かしかをとても心配していたが、楽しく過ごすことができ、とてもうれしそうであった。自分から昼の休憩時間の遊びを約束でき、積極性が出てきている様子が見られた。

第3回の交流及び共同学習では、居住地校の「10歳を祝う会」の行事に対象児童が参加した。自分の発表では、練習をしたもの下を向いていることが多く、口の開きも声も小さい傾向があった。「10歳を祝う会」のプレッシャーに加え、一番苦手な給食でかなり意気消沈していた。それでも友達に家に来て一緒に遊んでほしいという気持ちが強く、しっかり遊ぶ約束をしていた。最後のお別れの話は気持ちを込めて発表することができた。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対応のためすべてリモートで行った。国語の授業交流では、「古典の世界」で、論語と漢詩の一節について読みと意味を確認し、最後に各自、自作の「論語」を作成し互いに発表し合った。本人の感想は、「声が聞こえなかったこともあり楽しめなかったが、友達との交流はこれからも続けていきたい」であった。聞き取りにくかったときにもう一度言ってほしい旨を伝えたり、自分の考えを発言したりすることができた。また、発言の声が大きくなってきた。

リモートによる休憩時間の交流は、居住地校児童4名と15分間程度、毎週1回のペースで年間計16回行った。内容は「自己紹介」と「ミニゲーム」。ミニゲームは居住地校の児童が考えた「マジカルバナナ」「しりとり」「足し算ゲーム」など。毎回、にこやかに参加した。順番が分からないから名前を呼んでほしいこと、声が聞こえないことなど、自分から伝えることができるようになった。

#### <対象児童の変容>

始めは、居住地校児童の人数に圧倒されている感じで、対象児童が発する声は小さめであったが徐々に慣れ、大きな声でも発言できるようになった。また、自分から昼の休憩時間の遊びを約束することができるようになるなど、受け身的な言動が多く見られた当初と比べ、主体的、積極性に関わろうとする言動が見られるようになってきた。





## (エ) 居住地校児童の様子

令和元年度の第1回交流及び共同学習の総合的な学習の時間では、「福祉・未来の自分」をテーマにした学習を行った。学びの発表の場である「フェスタ」に向け、福祉について学びを深めていたため、対象児童に点字について直接教えてもらう機会とした。点字を実際に使っているところを見たり、点字で名前を書いたりしている姿を見て、自分たちの使っている文字と変わらないことを実感していた。そして、点字を身近なものに感じ、学ぼうとする気持ちを一層高めていた。始めはよそよそしかったやりとりも、時間の経過とともに徐々に打ち解けていき、ゲームの話題などで話が弾んでいた。

令和元年度の第2回の交流及び共同学習の道徳では、「思いやりのかたち」という資料を取り上げた。視覚障害者の女性に手を貸す主人公の行動や思いを通して、親切や思いやりについて考えた。相手のことを自分のこととして想像することにより、親切な行為を進んで行おうとする意欲を育てることをねらいとした。励ましや援助など直接的な思いやりの表し方だけでなく、相手のために自分でできる思いやりについて考えることができた。実際に視覚障害のある対象児童と接する中で、視覚障害だから親切にするという考え方に疑問をもつ声も上がっていた。

令和元年度の第3回の交流及び共同学習では、「10歳を祝う会」を行った。普段一緒にいない対象児童とともに、「10歳を祝う会」を行うことができることを、喜んでいて。練習の少ない対象児童に対し、声をかけて動き方を教えたり、発表の声が小さい対象児童の声に一生懸命耳を傾けたりするなど、一緒に会を成功させようとする自然な姿が見られた。

令和2年度の交流及び共同学習は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、リモート交流という新しい試みで、共同学習を行うことができた。

始めに1授業時間の45分をリモートでつないで、国語「古典の世界」を行った。一緒に漢詩や論語を音読したり、「マイ論語」を発表し合ったりして、学びを深めた。リモートでやりとりすることは慣れていないこともあり、待つ時間が長くなってしまったりなど実際の授業内容をこなすことに難しさも感じた。それらの反省を踏まえて、次のリモートでの交流ではしっかりと打合せを行い、授業の一部分に集中して交流することで、意見をしっかりと聞き合い、授業のねらいに迫る学習をすることができた。身の回りで見つけた角柱と円柱を発表し合う算数の学習では、対象児童が見つけた角柱や円柱に対し、「どうやって見つけたの?」と素朴な疑問についてやりとりしながら、交流が行われていた。その他、計7回のリモートでの授業交流を行った。回を追うごとに、リモートでの交流に慣れ、まるで近くにいるようなやりとりが行われた。児童の中から、「聞こえてないんじゃない」「ゆっくり話した方がいいよ」など、対象児童を気遣いながら、一緒に勉強しているという意識がより強く感じられるようになっていった。

授業交流以外にも、休憩時間に小グループでのリモート交流や行事のリモート交流をしたり、対象児童の習字を掲示したりすることで、クラスの一員であるという意識をもつことができた。



### <居住地校児童の感想>

- ・昨年はいろいろなことを聞ける機会が少なかったけど、リモートで毎週交流して、質問をたくさんできて楽しかった。来年も交流クラスになったらやりたい。
- ・オンライン上だったけど、お互いに笑い合えてよかった。
- ・今年初めて交流して、何をやればいいのかろうと思ったけど、いろいろ質問したり、ゲームをしたりして楽しかった。

## (2) 視覚障害教育の充実に向けた市の取組

### ア 研修会の開催

今回の研究については、弱視児童への教育だけではなく、受入れをする通常の学級の児童の教育にも関わる取組であると考えた。教育事務所管内の市町村教育委員会へ研修会についての紹介をし、参加を呼びかけた。数校からの参加希望を受けたが、新型コロナウイルス感染拡大予防の観点から公開をすることはかなわなかった。しかし、他地域と新たにつながり、情報交換をしたり、取組の共有を図ったりすることができた。

### イ 基礎的環境整備等の充実

市独自で個別の教育支援計画を作っているが、視覚障害に特化した様式がなかったので、県立盲学校の教員からの助言を受け、視覚障害に特化した個別の教育支援計画の様式を作成することができた。

県立盲学校の教員による模擬授業を参考に、教材・教具を作成した。自立活動では、ブラックボードを2枚つなぎ合わせた教具を作成し、眼球運動のトレーニング（数字マグネットを貼って順にさわる活動や、絵カードを貼り、単眼鏡で探す活動）に活用することができた。

また、段差に黄色いテープを貼ったり、使用する教材のファスナーを使いやすくするために見えやすい色の紐を付けたりするなど、弱視児童が自分で活動できる工夫を行った。

単眼鏡の購入に関して、購入方法や倍率の助言を受け、児童に扱いやすい単眼鏡を購入することができた。

### ウ 市内小・中学校への還元

市特別支援教育研究部会では、居住地小学校で開かれた事前学習会に参加し、「特別支援学級の児童を受け入れる、通常学級担任のよりよい指導・支援の在り方」について学んだ。コロナ禍で大人数の参加が難しかったため、部会の代表が参加し、研究部員に伝える形で行った。

#### ① 事前学習会の実際（授業研究）

交流を行う通常学級の担任にとって、特別支援学級の児童（A児）を受け入れるとき、クラスの児童が精一杯受け入れ対応しようとするのが、A児にとって本当にプラスになっているかがとても気になっていた。そのため、過度な対応になっていないかということを考えるきっかけとなつてほしいという理由から、授業研究では内容項目は「親切・思いやり」である道徳の授業を選んだ。



【タブレットに考えを打ち込む様子】

#### ② 授業の様子

授業の終盤の「本当の親切とは」を全員に問う場面では、「行動するだけが親切ではない、主人公のように相手を思うことが大切」「相手のことを思って迷惑をかけないようにすること」「心で思うこと」等を、各自がタブレットに打ち込んだ。その後、自分の意見を発表し合い、A児も自分の意見を堂々と発表する姿が見られた。

#### ③ 研究協議会

授業の後には、リモートでの協議会を行い、県立盲学校の担当の先生から御指導をいただいた。教員の立ち位置や見守りと支援のタイミング、見え方を担任が把握しておくこと等、基本的なことから教えていただいた。また、交流学級での授業そのものの目標が、特別支援

学級の児童にどのくらい身に付いたかということが大切なことであるという御指導をいただいた。

#### ④ 市内小・中学校への還元と今後の可能性

授業の様子を録画したビデオを授業研究に活用し、特別支援教育部会で共有を図った。

リモートを活用したことで、現在市内の小・中学校で行っている交流の幅も広げていける可能性を見つかることができた。例えば、市内で行う合同の校外学習については、事前にリモートで中学校区ごとに自己紹介や打合せをした上で行えば、より交流が深まるとも考えられる。また、進学する中学校の様子を、小学校を卒業する前に紹介してもらうことで、スムーズに就学を迎えられるかもしれない。コロナ禍の中で試行錯誤しながら行ったリモート活用が、これからの交流及び共同学習に生きていくと考えられる。



【リモートでの協議会の様子】

## 5 成果と課題

### (1) 研究の成果

交流及び共同学習における相互理解に関しては、対象児童のニーズを明確にし、効果的な支援の在り方について検討し、その上で対象児童の実態や交流学級の状況について双方の関係職員が把握した後、児童同士の理解が進むよう授業立案・実施、評価を行った。その結果、対象児童については、受け身的な言動が多く見られた当初と比べ、積極的に関わろうとする言動が見られるようになってきた。また、居住地校児童については、回を追うごとに交流に慣れ、対象児童を気遣いながら、一緒に勉強しているという意識がより強く感じられるようになる様子が見られるなど相互理解が深められた。

地域の小・中学校における視覚障害教育の充実に関しては、視覚障害児童への支援・指導についての疑似体験を含めた基礎的な講習を行った上で、弱視学級担当教員が研究授業を実施し、交流学級在籍児童への視覚障害教育について協議したことで、教員の立ち位置や見守りと支援のタイミング、見え方を担任が把握しておくこと等について理解を深めることができた。また、他地域と新たにつながり、情報交換を行い、取組の共有を図ることで、視覚障害に特化した個別の教育支援計画を作成したりすることができた。併せて、事前にリモートで自己紹介や打合せをすることで、より交流が深まることも考えられるなど、コロナ禍の中で試行錯誤しながら行ったリモート活用が、これからの交流及び共同学習に大いに活用できる可能性を見出すことができたなど、地域の小・中学校の視覚障害教育の充実を図ることができた。

### (2) 今後の課題

本事業の目的である、交流及び共同学習における効果的な学習支援の方法を検討し、地域の小・中学校における視覚障害教育の充実を図ることについて、次年度以降も引き続き継続していきたい。しかし、継続していくことは容易ではない。互いに連絡を取りながら本事業でできたつながりを大切に進めていきたい。また、新型コロナウイルス感染症に対する対策として、リモートによる取組についてもより良い方法を検討し、積み重ねていくことが必要である。

## 6 おわりに

令和元年・2年度にかけて、盲学校と市教育委員会、居住地小学校を始めとした小・中学校が連携して、本事業の目的達成のために取り組んできた。令和元年度末から2年度にかけて、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、当初計画していた、交流及び共同学習や事前学習会の実施が難しくなったこともあり、十分な成果を得るには至らなかった面があった。反面、リモートによる取組を関係者の多大なる御協力を得て試みた結果、新たな可能性を見出せたこともあった。本事業で得られたつながりや成果を生かして、次年度以降も地域における視覚障害教育の充実を目指した取組を可能な範囲で継続し続けることができるよう模索を続けていきたい。